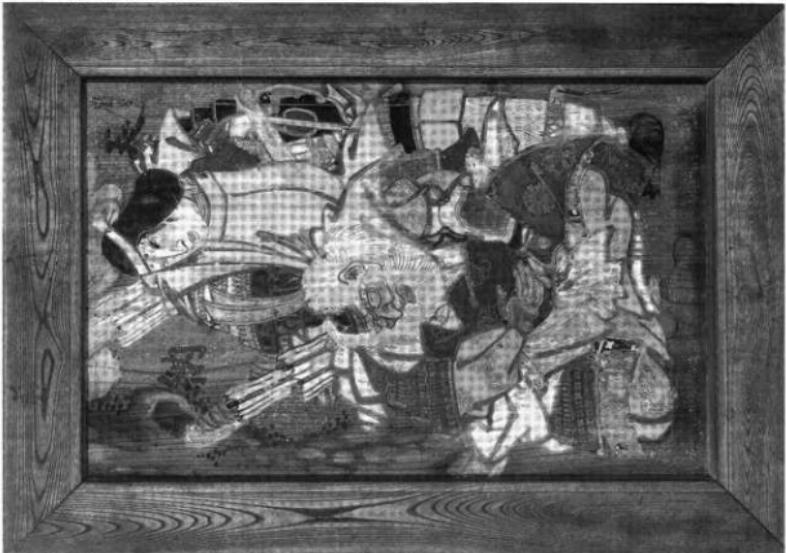
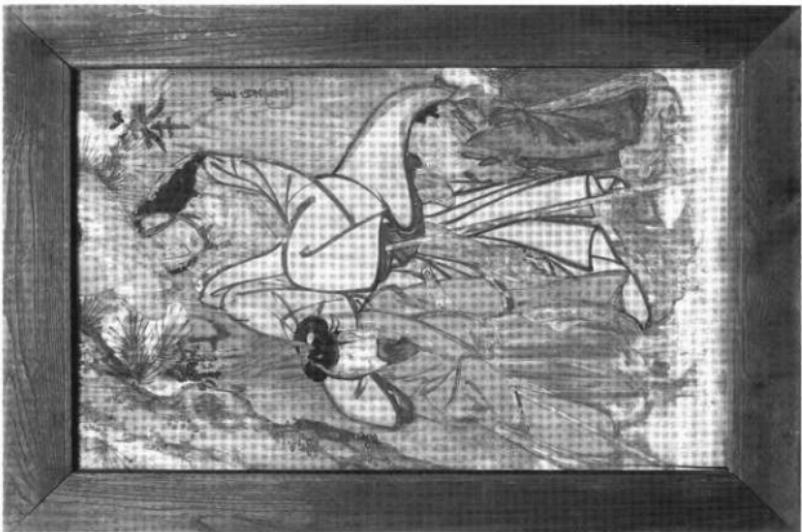


A-1 「鹿嶺御酒山牛祭・ノホ」

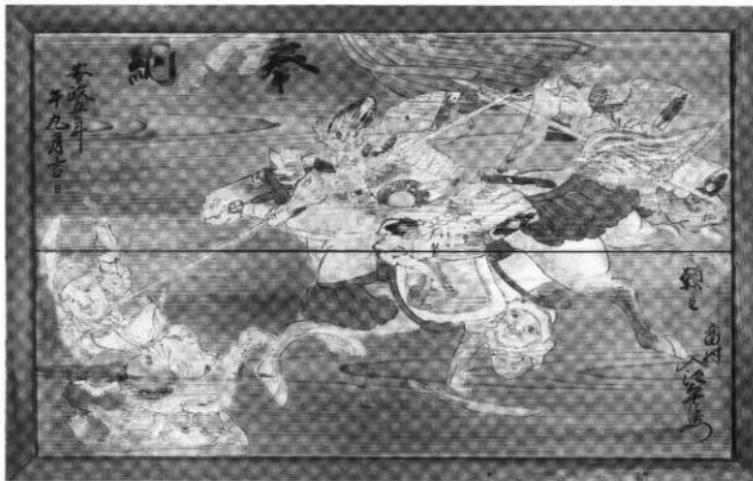


A-1 「神功皇后・武内佐連」

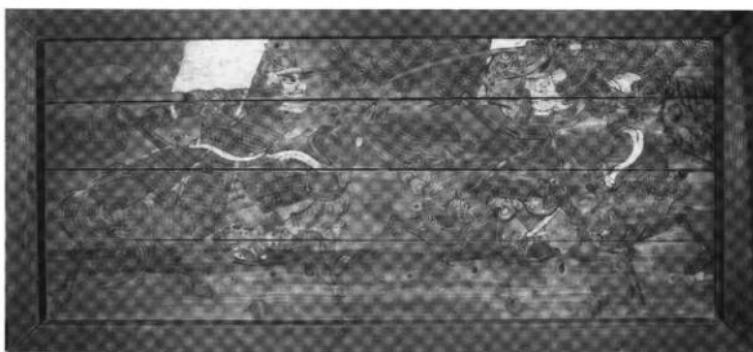


図版第15 春日神社絵馬

B-ア 「国姓爺合戦・和藤内因」



B-イ 「鐵・騎馬武者対戦図」



B-ウ 「西南戦役(田原坂?)合戦図」





上方、大名京屋敷方の下向が頻繁で公私との区別がつかぬことを嘆き、京役所の「目印印理」を要求しているし、嘉永二（一八五〇）年には

蔵米運送に絡み唐崎村では馬が減り牛に仕替える動きが出て狼狽している。

こうした社会的危機感が若中をして絵馬の奉納に駆り立てたと考へることはあながち無理ではない。いうまでもなく若中を構成する家々は伝馬諸役の事実上の負担者であり、場合によっては宿駅、交通労働の実際の扱い手でもあったのである。絵馬の作者が相応の人脈と報酬を要したであろう練達の画家らしいといふことも、安寧と応報を求める若中の強い願望を見て取れる。

「国姓爺合戦図」に攘夷をみるのは強引に過ぎるだろう。しかし「西南戦争」にはこうした彼らの社会性が伝統化していることが感じられる。また、大阪府権知事渡辺昇は明治七年、佐賀の乱や台湾侵略に対し旧高槻県貢属の士族に再三徵兵応募を促している。このことからみても最初の徵兵令に基づく兵士が

宮田村にもいて、西南戦争に参戦していたのかもしれない。

（行政史料専門員）

【絵馬】（特別展図録）福井県立博物館
【岸田敏馬氏旧蔵文書】（高槻市教育委員会所蔵）

【大坂府全誌】

など

この調査を行うにあたり、左記の方々の参考、ご協力、ご指導を得た。付記して感謝する次第である。

高橋真希、田口泰久、田中春生、畠中敏夫、藤原学、宮本裕次、望月直子、八木滋、山本邦文

春日神社、大阪城天守閣、大阪市立博物館、吹田市立博物館

【参考文献】

【高槻市文化財年報】昭和四九・五二年度

高槻市教育委員会

【高槻市史】第一卷・第三卷・第六卷

高槻市役所

【箕面市史】第二卷 箕面市役所

【伊丹市史】第二卷 伊丹市役所

【茨木市史】 茨木市役所

【絵馬】 岩井宏美 法政大学出版局

【大絵馬集成】 須藤功 法藏館

しば村の運営を压迫・干渉し、村内秩序を混乱させたので一八世紀半ばには幕府・藩にによって規制の対象になつており、解散を命じられることもあつたが、村運営には不可欠な集団として明治に至つてもなお存続した。

若中が村の祭礼の重要な担い手であり、春日神社が他ならぬ官田一村の氏神であれば、

かな成長を祈願して絵馬を奉納するのは当然である。他村でも石灯籠や狛犬の寄進などは枚挙に暇がない。しかしさらに加えて寒天製造の盛行した服部村浦堂に「力石」がのこり、城下町高瀬の京口では「道標」の建立があることをみると、宮田村でも何らかの村の独自の機能や歴史が反映しているようと思われる。

近世の宮田村について特記すべきことの一
つに、芥川村との立会伝馬役がある。芥川宿
が山崎通（西国街道）の宿駅の一つであった
ことはよく知られているが、宮田村もまた、
芥川宿伝馬役の三分の一を負担し、伝馬役人

二名を出役させる立会村であった。それは同時に
じ街道の瀬川宿と半丁村（箕面市）との間の関係
と同じであった。街道の芥川村と宮田村との
間には郡家領五町半余、水室領九町余の距離
があるにもかかわらず宮田が立会村になった
のは、郡家・水室とも本村集落が街道から遠
く離れていたからであろう。

七〇三) 年幕府の安成川通船許可に対し唐
山崎通助鄭廃止・通行許可制の決定にいたる
まで、山崎通利用の大名は西諸藩の三分の一
である。しかし寛永の參勤制定以来、安永の
一、月平均二回に及ぶといい、元禄一六(一

崎・三島江の芥川宿助馬が減少するとして反対したさい、「芥川村馬借宮田村」として参 加しているからこの立会設定は駅制以後かなり早い時期だと思われる。

当宿」と併記しているのである

天保に入り畿内の政治情勢はようやく緊迫の一度を加えてきた。外国船の日本南北辺の侵犯、水戸・長州など列藩の藩政改革、江戸を中心とする幕府御用金の賦課、加えて大飢饉など一連の進行はさあ然り大塩平八郎の大坂市中一揆で頂点に達するが、これと並行して西国を結ぶ街道もまた繁雜を極めた。天保六年、宮田村は公用人馬だけでなく京都官営當

には宮田村は馬借入用を連満させ、馬借役人を芥川問屋に駐在させないという事件を起こし、両村の領主である高槻・永井氏と代官・

又兵衛

治郎吉

理兵衛

善治郎

平兵衛

徳三郎

平五郎

與三吉

卯吉

庄次郎

辰之助

C 「西南戦役（田原坂）」合戦図

縦九二・四、横一九二・五

画中の名札書きが剥落してほとんど判読できないが、部分的に西南戦争の上士隊長の名が見え、背後に熊本城が見えることから、熊本領内の戦役最後の激戦を描いたものにまちがいない。

絵馬の奉納日は戦役終結一周年にあたつており、この戦事が物心両面で宮田一村に与え

た大きな影響を物語っている。

【墨書】

「額縁梓・上」「奉納」

「同・右」「明治十一年戊寅第十有月」

「同・下」「

「善次郎」「徳三郎」

「庄次郎」「卯兵衛」「與三吉」「馬之輔」「伊三郎」「藤吉」

「市太郎」「音吉」「龜吉」「為吉」

四 絵馬と若者組

この春日神社の絵馬は、奉納主体が、安政の国姓兼合戦団のみ個人であることを除き、すべて「若中」若者組であることが注目される。いうまでもなく若中は子供中の上位、宮座中の下位に属する村落内部の社会集団であり、畿内・西国では近世の比較的早い時期から存在した。多くは十五歳以上の長子で構成され、通常、神事祭礼興行（雨乞いも）や村内の非公的治安警備、消防、道普請、井堀普請、家普請などの労働奉仕活動を担い、「若者宿」などと称する集会所をもつて、地域によっては厳格な組棟や加入・脱退儀礼をもつていた。その結合の強さや活動力はしば

【画 中 中】「村田三佐（新八？）」「野津（道貢？）」「谷（干城）」

龍吉

—イ 神功皇后と武内宿禰(三枚組の一)

平八

縦九八印、横七〇印

A —Aと組をなす。画題は「日本書紀」以

來の神功皇后説話に基づく。すなわち、仲哀

天皇の皇后であった神功皇后は、天皇の喪を

隠して新羅に出兵するが、そのとき饑飢をして

おり、事終わって帰國の途次、筑紫で応神天

皇を出産したという。画面左、武内宿禰が抱

いているのが応神天皇。「安産」の象徴であ

る。なお、額縁枠下の連名は奉納主体の若者

組一同である。

【墨書】

〔額縁枠・上〕「御宝前」

〔同 . 右〕

〔同 . 左〕「弘化三丙午年霜月吉日 當村若中」

〔同 . 下〕「幸助 薩兵衛

幸治郎 藤市郎 平治郎

渡つたという絵馬は、その鄭成功の清軍に対

する奮戦を描いている。

【墨書】

〔画面・上〕「奉納」「同・右」「願主 当村

伊右衛門 又兵衛 藤右衛門 入江 平左衛門」

増次郎 「同・左」「安政五年午九月吉日」

【墨書】

〔額縁枠・上〕「奉納」「同・右」「願主 当村

伊右衛門 又兵衛 藤右衛門 入江 平左衛門」

【墨書】

〔同・左〕「國姓爺合戰・和禪内因」

縦六一・五印、横九六cm

近松門左衛門の淨瑠璃「國姓爺合戰」に題

材を取つたもの。福建省の人で明末の武将で

あつた鄭芝龍一官は、若い頃日本に来航し、

平戸・田川氏の娘と結婚し一子を設けた。そ

れが鄭成功で、平戸生まれ幼名福松。近松作

品では「和禪内」と呼ばれている。一官は巨

富を築き明に帰つたが明朝滅亡後は清に帰属

しようとした。しかし子の成功はこれを良し

とせず、金門島に拠つて日本に援兵を求めて

抗清を貢き、南京攻撃に失敗した後、台湾に

渡つたという絵馬は、その鄭成功的清軍に対

する奮戦を描いている。

【墨書】

〔画面・上〕「奉納」「同・右」「願主 当村

伊右衛門 又兵衛 藤右衛門 入江 平左衛門」

増次郎 「同・左」「安政五年午九月吉日」

【墨書】

〔同・左〕「國姓爺合戰・和禪内因」

縦九二一印、横一九二・五cm

絵馬に騎馬武者の対戦図は多いが、鍼を持つ

ものは珍しい。源平説話によるものか、あるいは源頼光の郎党坂田金時かとも思われる

が、今しばらく検討を要する。

【墨書】

〔額縁枠・上〕「奉納」

〔同 . 右〕「明治四拾丁未年初秋吉祥日」

〔同 . 左〕「村内安全」

〔同 . 下〕「宮田村總若中

要蔵 中藏 魏吉 藤吉

広がりのなかに御稻田の供御人集落を広く含む可能性も浮かんでくるのである。因みに春

日神社の祭神は大和と同じ天兒屋根命・武藏

輪神社が大和・三輪から勧請されたとすれば

畢竟奈良から入った酒造家紅屋との関連で考

えねばならず富田庄本来の氏神であるとは言

い難いのである。

宮田遺跡は十三世紀にはいつて急速に縮小

する。そして先の十五世紀半ばの西国街道沿

道の「宮田」集落（近世の宮田村に直接繋が

る集落）の記録の出現となるのであるが、こ

こでも宮田遺跡から宮田村への移動を考えら

れないだろうか。街道交通が次第に激しくな

り、民衆の物産交易もまたようやく盛んにな

る時期である。室町期に入つて生業の態様と

家族構造の変化が村落の景観を一変させたと

しても不思議ではないのである。西国街道の

南後背に主たる集落の存在もなお予測できな

いではないが、それは今後の発掘成果に待ち

宮田村の成立経過と春日神社の立地、成立

を以上のようにおさえておいて、絵馬の考察

に入ろう。

「出世」の象徴とされる。

絵師はA—イとともに、「豊貞」とあるが、

歌川派で相当の力量の絵師であると思われる

ものの、詳細はなお検討の余地がある。ある

いは当時の芝居看板絵師の可能性もある。無

調査対象とした絵馬五面の画題・墨書・年

紀の概要是次のとおりである。

A 浮世絵（芝居絵）絵馬

—ア 常磐御前（三枚組の一）

絵九八cm、横六七cm

杉板・糊粉下地の彩色芝居絵である。中央

にやや浅めの市女笠を被り、懷に乳飲み子の

牛若を抱き、白杖をついた、六波羅を追われ

る型どおりの常磐御前を描く。左に長じた今

若、右に幼少の乙若を配置し、背後の松樹は

枝に雪を付けている。幸若舞に起源する常磐

舞の中 「奉納」

「額縁棒・上」 「御宝前」

伝説の舞台の一場面である。今若は稚児體で

小刀を手ばさみ、白杖をつくが、乙若がいか

にも冷たそうに両手を口に当てるのが微

細に描かれ、印象的である。絵柄は平家の探

「同 . 右」

「墨書」

「額縁棒・上」 「御宝前」

「絵師落款」

「豊貞（印）」

「画面 裏」 「天切像 ま尺三枚へな」

「弘化三丙午年霜月吉日 當村若中」

徳四(一四五二)年四月に有馬温泉^{湯治に赴}いた相国寺・瑞渓周風の紀行文「温泉行記」であるとされる。彼はその途次、西国街道を通じて沿道の地名を記録している。

分解、水害や干害などによる地味の不安定さなどによる一族一村ごそつての離村も考えられ、宮田遺跡は郡家今城遺跡からの移住であろうとも推測されている。

大炊寮世襲長官中原氏を頂点に預所、下司、御稲仕女、供御人と階層性を有していた。

(御稻田の在地管理権)は鎌倉末期に右衛門尉以下証文等で貞直なる者が「代々寮家御下文以下証文等」

よつて「二世紀中頃の集落一屋敷群」が明らかにされている。それぞれ一棟の建物と並ぶ様子は、たとえば「一遍上人絵伝」にみる前溝・垣根・門守りを備えた屋敷構えと略似しており、それはまさに鎌倉期の景観をよく伝えているといえよう。

この宮田遺跡の調査成果には三点の意味がある。一つは女瀬川対岸に位置する付随している。

宮田村の鎮守でありながらバラ果樹とかなり離れて所在しているのが疑問であつたが、宮田遺跡の存在でこのことが氷解するといえよう。

春日神社自体の発掘がなされていないのでこそれも推測の域を出ないが、一二世紀の屋敷跡が神社を取り囲むように立地し、旧河床が神社の北辺を通るようと思われることから、神社の勧請をこの時期にあってもさほど奇異ではないであろう。

として買得していたが、これを妙一房が譲受けた。さらに妙一房から御福仕女戦を譲られた友阿は觀応元（一三五〇）年七月これを一分为して二人の娘に分与した。その後絶えてて続かないため貞治四（一三六四）年四月にたり中原家が催促したところ、そのうち姉安堵料のみを納めるといったのに対し、妹は心房は安堵料に申次料を加えて上納することとし、半金を即金、半金は十月に納めると

律令期集落 郡家今城遺跡との関連である。
同遺跡は一世紀以後廃絶する。古代
の住居跡は一般に一世紀になると時を追つ
て消滅するとしている。それは口分田の草
給を基礎として成立する古代村落が生活の場
としての歴史的限界を露呈したものと理解で
きる。庄園の展開を受けた土地保有の流動も
ある。

第三には文献との関連である。直接の史料には恵まれないが、国領莊園としての「大炊寮領富田御稻田」が想起される。やや時期は下がるが、南北朝期にはこの御稻田から供御役として毎月五斗の稻と一斗の粥用の稻のほか、京都平野社の神事供進用の御強物などを上納しており、富田御稻田の管理支配は

したので、その年六月に大炊寮は堺心房に田御稻田仕女職を安堵したという。この経は別として富田の庄域に国衙領があったことは注目に値する。その成立はいわゆる皇室営田の自立によるものとするのが通説である。ことから、御稻田の集落での彼女らの氏神社「春日神社」でなければならず、宮遺跡の

宮田・春日神社の絵馬

富井 康夫

二 旧宮田村と春日神社

一 春日神社の絵馬調査
宮田春日神社は、高槻市宮田町三丁目に所在する。地元の要望を受け平成九年度に同社所蔵の絵馬六面について調査を行ったので、その概要を報告する。

調査当初、絵馬は拝殿の梁に掛けられていた。同社の拝殿は本来、舞殿も兼ねた四本柱の吹き署しであったと思われ、ために傷みが激しく六面のうち一面は押し絵が剥落し、中綱が散乱して画題も判別できないため今回の調査対象から除外した。

これらの絵馬については墨書きが認められるほかは由来を伝える史料はなく、在地の史料文献も限られている。このため報告は推論や留保条件が多くならざるを得なかつたが、大方のところを叱正を乞う次第である。

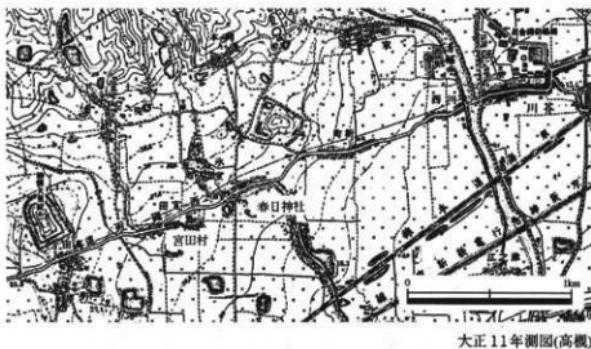
この伝承は記紀やその類本には存在しない。また、文献による「宮田」地名の初出は、宝

近接し、市の中央を東西に貫通する西国街道以南に位置する。近世・近代を通じて居住集落は西国街道に面している。

「宮田」の地名については在地に一つの伝承が残っている。上古、この地一帯は藍野の里と呼ばれていたが、繼体天皇葬余玉穗宮の

時この地から一人の少女が後宮に召されたといふ。ある日の宴で、天皇が女性達に諸国の米の作柄を問うたとき、彼女は即座に、自分の故郷宮田の米は天下の逸品ゆえ供御に召されたいと奏請した。果たしてそうだったのをこれを屯倉にあて、宮田と称したという。記

紀に部民の記載がこれ以前よりあり、繼体期には筑紫の磐井の子葛子が連座を恐れて精屋屯倉を献じた話は有名だがいざれも後代の粉飾であり、もとより宮田伝承も近世以後の富田後背の酒米生産の隆盛と現繼体陵の確定に端を発する付会であろうと思われる。因みに



大正 11年測図(高槻)

高槻市文化財年報 平成11年度

平成13年2月28日

発 行 高 槻 市 教 育 委 員 会

文化財課埋蔵文化財調査センター

〒569-1042 高槻市南平台五丁目21番1号

印 刷 株式会社 邦 文 社 高槻支店

〒569-0844 高槻市柱本四丁目18番3号